

愛の苦悩

——サン・テクジュペリーの女性観——

沢 護

(1)

サン・テクジュペリーの作品を、小説とか物語と呼ぶのは異論があろうが、少なくとも何らかの筋を有しているものは、『南方郵便機』『夜間飛行』『人間の土地』『戦う操縦士』である。これらの作品に見られる女性像は、さほど大きなテーマではないかもしれないが、最初の二作品では、行動にかきたてられた主人公が、行動とは別の何かを見だそうとしていた。それは、ファビアンの子の行為が解答を与えるであろう。サン・テクジュペリーの友情が愛へ、さらに同胞愛へ向わせたもの、それは婚約者とその婚約破棄からくるものではなかったのか。人間関係により重きをおくサン・テクジュペリーの立場は、彼の女性観が大きな手懸りとなりうるのである。

彼の最初の作品には若い人妻が、後の作品には仙女のような乙女が登場し、何時も彼女たちはやさしい微笑をたたえた美しい女性で、同時に沈黙をかねそなえた女たちなのである。

『南方郵便機』に現われる女は、ベルニスを目を通して描かれるジュヌビエーブという若妻であるが、彼が目を閉じるときまって写しだされる姿は、15歳頃のジュヌビエーブの乙女の姿なのである。既に、女として成熟しきっているのに、彼女をしっかりと抱くと、彼女は、昔、涙を流して泣いていた可愛い少女になってしまうのである。しっかりと腕の中に抱かれないと望んでいる捕われの女でしかないのに、彼女が富裕な家庭に育

ち、純真な真心をももった女であるため、ベルニスは、彼女を傷つけまいと色事などを全く考えずに一夜を過ごす。彼には、彼女が心から自分を愛していることを知ってはいたが、彼女を抱きしめると、すぐ、ぼろぼろに崩れ落ちてしまいそうな乙女の映像に、あまり多くを求めすぎてはいけないといった感情が強く支配している。それは、何か知らざる宝物を、側から眺め、命を賭けて守り通そうとする精神が、彼の心を貫いているのである。いわば、ベルニスは、何時も過去の思い出を大切に、初恋を胸深く守っておきたかった。この二人に共通な子供の頃の思い出の中で生きていながら、ベルニスは、二人の世界より広い世界に彼女を導こうと努めたが、自分の世界に連れ込むことができなかった。『飼いなす』ことのできなかったジュヌビエーブは、もはや仙女でもなく、たとえベルニスの愛に忠実ではあっても、この愛は彼女自身のためという女のエゴイズムから二人の破綻があらわれる。この精神的失敗と共に、サン・テクジュペリーの作品にミラーやローレンスのようなエロティズムはないが、この作品で最もそれを感じさせる『女の脇腹にふれる』条りでの肉体的失敗が、ベルニスに「生きるということ、それは、おそらく（愛とは）別のことなのだ¹⁾」と語らせ、アフリカに旅立たせる。彼には、ニーチェの『夏』を思い出させる短い憂の多いものだった。サン・テクジュペリーは、このような愛の矛盾や対立する諸要求に解答を見だそうとして『夜間飛行』でも、夫の職業にもとずく要求と妻のとを一致させようと試みるが、ここでも成功しなかったのである。

『夜間飛行』においては、結婚して僅か1カ月にしかない若妻、しかも、危険な職務の飛行士を夫にもつシモーヌが、夫を職場に送りだすときの心境と、夫の搭乗した飛行機が行方不明となり、不安におののく内面の葛藤を描くことから、彼女が浮彫されている。サン・テクジュペリーが、必要以上に若き妻と形容するシモーヌは、夫の消息不明を案じ、自分の内にある情熱も、愛情も、泣くことさえも押えている失意の底にある女であ

りながら、「彼女は、極めて美しかったし、男たちには神聖な幸福の世界を想わせた²⁾」若々しい女であった。だが、シモーヌは夫の職業の犠牲者であったため、ジュヌビエーブと同じように自分の幸せを希う極くあたりまえの女だったのである。この作品で、サン・テクジュペリーは夫婦愛の無力さを提示したにとどまった。

前記の二作品を書きあげてから、次の作品を発表するまで、八年もの歳月が流れた。この間、サン・テクジュペリーの身边には、いろいろの出来事が起こったが、作品に現われる女性には大きな変化はなかった。ただ、『戦う操縦士』での女性像は、かなり象徴的で『城砦』で語られる女と似た姿をして現われてきている。

『人間の土地』で、少なくとも意味を持たされ語られている女性は、『オアシス』の章にあるただ二人の乙女の像だけである。サン・テクジュペリーが、オアシスについて語るとき、われわれが砂漠の中で身をすりへらし、水への渴望のとき見いだすオアシスとは違う。彼がオアシスについて述べるとき、きまって、それは神々や愛や女性を象徴している。

『人間の土地』でのオアシスもまた、この乙女の魂によって人里遠く離れたところに、沈黙のうちに創られたものである。サン・テクジュペリーは、とある草原に着陸し、お伽話しにでてくるような生活をする。舞台はずんぐりとし、ボロボロで、床板はすり減って、扉は蟲喰まれていながらも、掃除はゆきとどき清潔に艶拭きされ光っているといった伝説の中にあるようなお城である。ここで、彼は、もの静かで慧敏な、しかも慎み深く虚栄を知らない二人の乙女と食事をする。今は昔と過ぎ去ったこの時の模様を回想し、彼はこの二人の落着いた仙女のような乙女に触れるのである。

「この二人の仙女はどうなったであろう。きっと、結婚したであろう。そうだとしたら、彼女たちは変ったであろうか。娘から妻になるということは、極めて大切なことなのだ。彼女たちは、

まだ慣ない家庭で何をしているであろうか。……あの頃の彼女たちは、何か普遍的なものにかかわっていたのだった。ところが、ある日、娘のうちに妻が目覚めてくるものなのです。³⁾」

サン・テクジュペリーの女性観の変化が読みとれようが、『戦う操縦士』でも前作と同じように宗教的雰囲気³⁾が彼の描く女性像にたちこめている。

『戦う操縦士』になると、前の諸作品より一層、女は姿を現わさない。ただ、ある農家での食事とき、心なしかある女の顔の輪廓を偲ばせる美しい乙女が、彼の隣りに腰をおろす。この無口でもの淋しげな容貌ではあるが、非常に美しい彼女を観察しながら、彼は、このつつましやかな乙女の姿に神秘的な静けさを認め、そのため不思議ななごやかさを感じて安堵するのである。乙女の顔立ちは「まさに、沈黙の王国の平和」⁴⁾であり、彼女の姿は、煌煌しい宗教的なものをかもしだしているのである。

愛が沈黙となるとき、その愛は、心の奥底でそっと焰をともし続けているのであり、沈黙の応ずる祈りの中には、神が存在するという思想は『城砦』で示されているものだが、この乙女の静けさの中には、もう『城砦』で語る愛についての下絵が描かれている。さらに、女性に宝物といった表現をたびたびとるサン・テクジュペリーは、『戦う操縦士』でも乙女に宝物といった念を抱く。それでは、彼の好んでいう宝物（財宝）とは一体なんであろうか。それは、「老人にとっては青春であり、守銭奴にとっては富の保証であり、恋人にとっては愛の保証であり、うぬぼれ屋にとってはうぬぼれの保証」⁵⁾なのである。彼は、女たちの何処かに隠されているものと覚しきものを、宝物にたとえる場合もあったが、『城砦』では、次に引用する言葉のように、はっきりと定義している。

「宝物とは、決してもろもろの素材の本質に由来するものでないだけに、まず目には見えないものである。」⁶⁾

以上、記述したように、サン・テクジュペリーのロマネスクな作品に、ほとんど女性の姿はない。ある程度の意味を与えられ、作中に登場する女性は、彼の脳裡に理想化されて刻みつけられた女性像であるだけに、諦めの中におかれた姿をしている。当時の最も危険な職業にたずさわリ、たえず死への挑戦をしていた勇敢な若い男たちからすれば、彼らの描く女性像が理想化されたものだとしても驚くに値しないであろう。特によく浮彫りされた『南方郵便機』のジュヌビエーブは、サン・テクジュペリーが27歳の時に書きあげた作品であるだけに一番鮮かで、彼の若き日に会った幾人もの女性から形創られた姿をしている。

サン・テクジュペリーの作品に描かれた女性は、むんむんした女の体臭や肉感はなく感じられず、さらに、女の嫉妬とか、女に対する情欲、誘惑といった面での姿態にも無関心でいる。彼の描いた女性は、抽象的な女の場合が多いが、『人間の土地』や『戦う操縦士』での乙女の場合は、明らかに宗教的な意味をもって描かれ、『聖母マリヤ』を連想させるであろう。彼には、愛の中では禁欲を求め、幸福を得るためには女性にも性欲をおさえさせようとする感情が強く支配しているだけに、嫉妬や情欲に狂う月並な女を登場させることを自ら嫌悪し、陳腐な表現を女性に冠せたくないでいる。したがって、われわれの目を通してはサン・テクジュペリーの描いた女性は、憧憬としか写らない女の理想像であり、その意味で、たとえば「女が『星の王子さま』の源である⁷⁾」としても、彼は女について全く書かなかった作家なのである。

(2)

サン・テクジュペリーの女性への愛は、ルネ・ド・ソウシヌによって開花された。二人の間にかわされた数多くの書簡が、その間の模様をよく伝えている。ルネの兄、ベルトランとサン・テクジュペリーは、ボッシュ校にいたとき同級であったので、ルネとの出会いは早かったと考えられる

が、残された手紙からすれば、1923年秋と推定されるものが最も古い。この時、サン・テクジュペリーは彼女と婚約していたが、1923年1月、ル・ブールジェで恐しい飛行機事故の犠牲となり、頭骸骨折で永い回復期をよぎなくされた。当時の危険極りないパイロットという職業が、ルネの家族とのいさかいの種となり、この事故をきっかけとして、婚約者の両親の切なる願いを聞き入れ、飛行機に乗ることを断念した。1919年から1939年にかけての20年間に、若きパイロット 121 名が航空路の犠牲になっていることを知れば、ルネの家族の申し出は当然であった。その後、彼はパリで仕事を捜し、タイル工場の制作検査係として入社したが、ここでの生活は苦しみ以外のなにものでもなく、すぐ貨物自動車販売員に転職したが、「実に仕事がありすぎて、しかも馬鹿らしい仕事⁹⁾」でしかなかった。事実、彼の務めた1年あまりの間に彼の売りさばいたものは、トラック1台という実に無能な販売員でしかなかった。しかも、仕事の増加につれ憂鬱となり、ついには飛行機を操縦している日を夢みるようになっていった。

一度は飛行機乗りを断念したサン・テクジュペリーではあったが、彼にとって飛行機は神から授けられたもので、遂に婚約者ルネとの婚約を破棄するまでの最悪な事態におちいった。このへんの事情は良く知られてなく、ただ、二人の間はうまくゆかなかったとしか結論づけられないにしても、サン・テクジュペリーには、たえず愛し愛されたいといった願望はあったのである。

「結婚したいという気持は少しありますが、ほんのちょっとです。でも、だれとかわかりません……。アントワヌ2世が欲しいというわけ¹⁰⁾です。」

さらに、妹ガブリエルには、

「結婚して、君の子供のようにすてきな子供を持ちたい気持が少

しあります。でも、それには二人でなければなりませんし、これ
まで自分の気に入った女性をたったひとり知っていただけなので
¹¹⁾す。」

この『たったひとりの女性』とも別れなければならなかったほど、サン・
テクジュペリーは飛行機に魅せられていた。婚約破棄からくるものであろ
うか。この後数年間にわたって、彼は女性にたいし実に皮肉たっぷりにな
ってゆき、同時に女性にたいするコンプレックスが一層強くなっていっ
た。愛が孤独から己を救うと考えていた彼にとって、この『飼いならせな
かった』女性のため、ますます自分の孤独の中にとじこもってしまう決定
的な原因となったのである。

「コレットだの、ポウレットだの、スージィだの、デージェィだの
ガビィだのといった女性に、がまんして云いよってみるのですが、
どれもこれもみな大量製産によるお嬢さんたちばかりで、二時間
もするとうんざりさせられてしまいます。まるで待合室といった
¹²⁾ものです。」

といった皮肉たっぷりの調子で、妹ガブリエルに手紙を書き送ったもの
の、次に引用する言葉のようにペシミスティクにも綴らなければならない
気持でいっぱいなのである。

「とてもきれいで、とても賢くて、魅力にあふれ、陽気で、しと
やかで、誠実で……こんなお嬢さんにお目にかかりたいものです。
¹³⁾まず、無理でしょうネ。」

この手紙は、サン・テクジュペリーの性格をあらわしているといえよ

う。六歳のとき描いた絵が、大人にわかってもらえなかったため、絵を描くことを断念したように、青年期の感情豊かなときの弟の死が、彼を信仰から遠ざけたように、又しても婚約者との別離がすべての女性にたいする冷淡さに向わせた。この頃から愛が、連帯的な飛行士を中心とした同胞愛にかわっていったのである。

サン・テクジュペリーは、自分の求めているものが、相手に見いだせなかったり、又一度でも受け入れてもらえなかったりすると、たとえ意見がおりあわなかったりしただけでさえ、最後まで口を閉じて開かない極端なきまぐれとエゴイズムが同居していた。先の妹に宛た手紙にたいして、彼の母は厳しく非難するが、それには次のように説明するのである。

「ディディ（ガブリエルの愛称）へ宛た手紙のことで、あまり責めないでください。あれはすっかり失意落胆の念にかられ書いたものです。お母さんのお書きになっていらっしゃる女性たちのことですが、ぼくには男友だちみたいなものです。ぼくは、誰かあるひとのうちに、自分の求めているものを見だせないとなると、もうがまんができません。……あの手紙に書いたようなひとが欲しいのです。¹⁴⁾」

さらに、彼はこの手紙を「嫌悪の念から書いたもので、厚顔破廉恥の念からではない¹⁵⁾」とあって、母が誤った角度から手紙を読んだことに抗議する。快樂の中でさえ、なにか学ぶべきものを捜し求めるサン・テクジュペリーの女性の理想像は、女性にとってあまりにも苛酷な要求であった。しかし、パリの陰気でじめじめした部屋で、ひとり淋しく家族より離れてする日常生活は、落胆のみある希望のない毎日であり、深夜、彼が己と対面するときの内面の葛藤を知れば、彼の態度は別に驚くに値しないであろう。まして、23歳から25歳にかけての青春のさなかで、あらゆる面の愛か

愛の苦悩

ら疎外していた彼にとって、失恋の痛手は大きく、その代償に母を選び、痛々しい数多くの便りを、愛情深くあらゆることに理知的な母に書かずにはいられなかった精神的な苦悩を理解してやらなければならない。

「ぼくが女性に求めるのは、この不安を鎮めてもらうことです。そのために、こんなにも女性を必要とするのです……ぼくの必要とする女性は、二十人もの女の組合せで創られるものなのです。あまり女性に求めすぎますので、すぐ息苦しくなってしまいま¹⁶⁾す」

この彼の、胸の内にある純粋な内面の苦悩を示した手紙からでも、彼は結婚したい希望はあるのだが、女性にたいする感情の上での冷酷さや軽蔑が彼にまつわりついている。ルネと別れはしたものの、このかつてのフィアンセが自分の心に描く女性のイメージとかけはなれたものだとして、思いきって彼女を忘れることもできないでいる。『手帳』に書き残された次の言葉は、明らかにフィアンセだったルネを指して書かれたものであろう。

「神によって男たちに与えられたのに、彼らには使いこなせない聖なる言葉。ぼくは、光の捏粉でできたこの女性を救ってやりたかったが、むなしく流れ去ってしまう粘土をどうしようもなかつ¹⁷⁾た。」

女性¹⁸⁾は『聖なる言葉』であり、「婚約のようなかりそめの幸」と自分にいい聞かせているサン・テクジュペリーにとって、彼の求める王女様はますます完全なものとならなければならず、そのためなお一層彼の手のとどかない彼方に飛び去ってしまうのである。

『聖なる言葉』という女性の比喩は、『城砦』の中でも同じような姿を

して現われる。「彼女を手に入れることができないのなら、渴きのあまり死んでしまうように思われた¹⁹⁾」にもかかわらず、彼女をひとたび手に入れたと、彼女を前にして「どのように振舞えばよいのかわからなくなっている²⁰⁾」のであり、女が「ひとたび捕えられるや、彼女はもはや存在しなかった²¹⁾」のである。粘土の如く流れ去ってしまったものは何だったのであろうか。婚約者ではなかったのか……

後になって、サン・テクジュペリーはますます女性から遠ざかってゆくが、確かに、若き日の彼にとっての愛についても女性についても彼の思想を知る大きな手助けとなるが、愛とは彼にとって失敗でしかなかった。そのためか、女をある物としてみなす『城砦』の首長の語るいくつかの矛盾に満ちた言葉をひきあいに出すまでもなく、彼の描く女性は次第に詩的で慎重深い精神性のものにとかわっていったのである。

1931年1月、サン・テクジュペリーは、アルゼンチンの作家ゴメス・カリヨの未亡人コンスエロ・スンシンと「身うちのものなどの反対を押しき²²⁾って」妹の住むアゲーで結婚した。二人の出合に関するエピソードは多い。ある日、サン・テクジュペリーは、友だちのすすめるままに、ある講演会に出かけた。講師は、若く美しい女性で、講演題目は『結婚』についてであったが、この若い女性講師は、結婚は愛を苦しめるといった論に始終していたため、彼が気に入って結婚を申しこんだという。だが、この話は信憑性がなく、出来すぎているように想える。それでは、コンスエロ自身の語る言葉に耳を傾けてみよう。

「私が、トニオ（サン・テクジュペリーの愛称）に初めて会ったのは、ベノス・アイレスでの外交団歓迎会においてでした。私たちが、ほんの少しおしゃべりをしましたら、急に彼が申したのです。『今晚、あなたを飛行機で誘いだし、星を見せてあげたい……』それで飛行機に並んで座ると、彼は叫んだのです。『抱いて

おくれ、好きなんです……ぼくを抱いてくれないわけがわかった
ヨ。ぼくがあまり醜くすぎるからなんだ！²³⁾』

一方、サン・テクジュペリーの母は、息子の結婚について説明するが、母の言葉の中に、コンスエロにたいする反感と非難とを読みとれるであろう。

「アントワヌは結婚します。アルゼンチンの作家ゴメス・カリヨの未亡人コンスエロ・スンシンと出会ったのです。エキゾチックで魅惑的なひとでしたが、極端なきまぐれと何ものも——精神的な仕事を必要とするものさえ——認めないとする態度とが、結婚生活を難しくするでしょう。でも、アントワヌは、彼女を愛しておりましたし、彼の心遣が最後まで彼女を包んでおりました。『星の王子さま』とアフリカからの数々の便りが、その感動的な証拠²⁴⁾なのです。」

母によって語られた二人の結婚生活の不一致については、別段驚くことはない。確かに、サン・テクジュペリーの俗事にうとく忘れやすい性格と、妻の奔放で野性味豊かな性格とでは、大きな障害はあった。だが、母が語るまでもなく、彼はコンスエロを深く愛していた。この面での『感動的な証拠』とするサン・テクジュペリーの最後の書『星の王子さま』に触れてみよう。

『星の王子さま』における象徴や比喻の中で、バラの花のパラболは最も明瞭な姿をしたもので、それは愛の象徴、とりわけ男の女にたいする愛、サン・テクジュペリーの失った女の姿をして現われる。おそらく、星の王子の住む小さな星で咲きほこるバラの花は、たったひとりの女性にかかわるものであったろう。そのたったひとりの女性とは、若き日の婚約者

だったのであろうか。それとも妻だったのであろうか。残された手紙や『城砦』で語られる言葉から、それを探りだすのは難しいことではない。妻へ宛た手紙を引用するまでもなく、又たとえそのバラの花が他の女性をも象徴している共通性があるとしても、サン・テクジュペリーの姉シモーヌのいう「『星の王子さま』は、コンスエロをバラの花の中に化身させたものなの²⁵⁾です」との言葉だけで充分なはずである。

『星の王子さま』に現われるバラの花は、いつも高慢で、王子にいろいろの仕事を強いるため、王子はこのバラの花から逃れ、自分の星を後にするのだが、バラの花への心配のあまり、結局自分の星に戻るはめになる。つまり、王子にはバラの花を世話する責任があったわけなのであるが、何と周囲の猛烈な反対を押しきって遙か南米から連れてきたコンスエロの姿を、さらに、平凡な生活をさけるため1年間の夫婦生活の別離を示す条りであることか。王子がいなければ、だれひとりとして世話するもののいないバラの花に責任を感じ、バラを愛する王子の姿からは、なんとサン・テクジュペリーの妻にたいする真摯な態度を偲すことであらうか。真実の愛とは、遠く求めてゆくところにあるものではなく、自分のすぐ側にあるのを王子が知るのは、時間の経過がずいぶんたってからのことであった。ここで、われわれは、サン・テクジュペリーの描く弱き性の最後のまとめを見だすのである。

1936年、リビア砂漠での遭難で、サン・テクジュペリーが死への挑戦をしていた真中に、改めて強く痛感し確認したことは、たとえ彼をいらただせることの多かったコンスエロであっても彼女が必要だということであった。暑さと渇きと疲労とで死と対面しているとき彼は妻のため母のため死から逃れようと苦闘し、遂に砂漠の死神の手をはらいのけた。砂漠の中から救出された二日目、カイロで書いた母への便りではどれほど妻を深く愛していたかを示す美しいほどまでに高揚された感動的な便りであることか。

「コンスエロのようにお母さんを必要とするものを、誰かのうしろに残しておくことは恐いことです。再び戻って疵ひ守ってやりたい猛烈な欲求にかられ、あなたの義務をはたすことを妨げるこの砂漠にさからいの爪をはぎ、山をも換えてしまうでしょう…
…ぼくが戻ってきたのは、いくぶんコンスエロのため²⁶⁾なのです」

母へ宛られた便りであるだけに妻のことを遠慮し、このリビア砂漠からの奇蹟の生還を母のためになしえたと綴っている。しかし、この砂漠での死との葛藤を見事に歌いあげた『砂漠の真中にて』では、意識のだんだん遠ざかるなかで、彼の胸に去来したのは、他ならぬ妻の顔でしかなかった。

「ぼくには、妻の目がまた見える。この眼のほかは、なにも見え²⁷⁾ない。」

さらに、北アフリカのオルコントからの便りでは、妻にたいする繊細な思いやりにつつまれ、家族からも離れ淋しく暮している妻のため、帰仏したいと願いながらそれができないでいるサン・テクジュペリーのもどかしさは、妻への愛の動かない証を示したのである。

「すっかり見棄られた、かわいそうなコンスエロのことを想えば、とてもあわれになります。いつか妻が南仏に身をよせましたら、ぼくにたいするような愛情をもって、自分の娘として彼女を迎えてや²⁸⁾ってください。」

次に引用する言葉は、何時頃だれのために書きしるされたのか明かではないが、『手帳』に残されていた条りで、この興味ある言葉は改めて『城

砦』の中でも展開されるものである。

「わたしが、おまえのうちに愛していたものは、どれひとつとして物質的な意味を持っていない。おまえの唇、それは形の世界に属しているあのやさしい微笑を形成するものなのだ。おまえの唇は、おまえの肉体の塊でなく、その並びなのだ。……精神的なものでないならば、なんら意味がない。²⁹⁾」

この『手帳』の言葉から多くを判断するのには誤謬をまねく危険もあるが、「私には、女たちについて想い誤っていたように想われた³⁰⁾」と形をかえて告白する条りを知れば、青春時代の完全な女性を求め、一生懸命に女性のどこかに隠されているとおぼしい宝物を捜し求めていた姿から遠くなったことを知るであろう。『城砦』の草稿をねる頃、サン・テクジュペリーは、漸く自分の渴きを癒してくれる女性はどこにもいなく、なに故に女性が創られなかったかを知ったのである。この作品には、もう青春の頃の心の隅にいつも宿っていたロマンティズムやイロニズムは消え失せ、女性是不完全なままでよいという解答に到達する。側にいる女性が美しく繊細であれば、見ために快くはあるのだが、女としてのみ眺めた場合に別の女のもとに走ってしまう衝動にかられることもあるとする。ここで、永遠に飽くことのない郷愁を覚える女性は、心のかよった数々の欠点をもった女でなければならなくなったのである。

「不完全なる妻よ、汝の不完全さのうちに心安らかに寝るがよい。私は、壁にぶつかりはしまい。汝は、目的でも報償でも、ましてそれ自体として崇められる宝石でもない。そのようなものであれば、私はすぐに飽きてしまうだろう。汝は、道であり、乗物であり運搬なのである。さればこそ、私は飽ずに生成しうるのでは

³¹⁾
る。」

さらに、愛の存在と妻とは、撤回しえないものだという考えが、一層明瞭になってゆく。

「……私は、愛を永遠に存続させたい。おのが選択の撤回しえないところにのみ、愛は存在するのだ。なぜなら、生成するためには限定される必要があるから……女のもつ意義は、妻たることである。私は、この言葉をより重き意味でみたした。かくて、おまえは、真摯なる心にて『我が妻よ……』と語るのである。おまえは、数々の他の歓びを見いだし、又、確かに数々の苦しみをも見いだすのだ。だが、その苦しみは、歓びの条件なのである。おまえが、妻たるもののために死ぬことができるのは、妻がおまえのものであり、おまえが妻のものであるから³²⁾なのだ。」

サン・テクジュペリーにとっての女性とは、彼女をただひとりの女として眺めるのではなく、女を通し、女を越えた何かを感じるものがなければ、女の存在理由がないのである。したがって、ここから『愛の沈黙』を守りながら、女をひとりのかけがいの女にしようと努める。彼の沈黙とは、そのうちにのみそれぞれの真実が実を結び根をおろすものを指す。それ故に、彼は常に沈黙のうちにのみ語る声を聞くであろう。彼の妻のために『コンスエロの唱える夕の祈り』なる言葉を書き残した彼の態度も自から理解できるのである。

「主よ、それほどまで御心を痛められるにはおよびません。ただ、私をあるがままにしておいて下さい。小さな事柄につきましては、虚栄に満ているように見えましても、大きな事柄には、つつましいのです。」

主よ、夫が私のうちに読みとるものと、いつも似させて下さい。

主よ、主よ、夫を救って下さい。夫は本当に私を愛しておりますし、夫なしでは、あまりに孤独となりましょう。けれども、主よ、私ども二人のうちで夫が先に天に召されますようになさって下さい。夫はあのようにとても丈夫そうに見えましょうとも、家の中で物音を立てるのを聞かれないとなりますと、とても苦しむからなのです。主よ、なによりもまず、夫を苦しみから免れさせて下さい。³³⁾」

この『コンスエロの唱える夕の祈り』は、サン・テクジュペリーの死ぬ少し前に妻のために書きあげられたものであるが、身勝手にわがままな言葉が目につく。彼の性格を如実に示したものだといえるが、それでいて、何とも暖かい目差しで妻を見守っており、彼の妻への愛情の深いことがわかるのである。それにしても『二十人もの組合せで創られた』女を求め、ただひたすら一途に愛することのゆきずまりを感じていた彼が、不完全なる女で満足するようになった経過は、何と大きな女への譲歩であったことであろうか。この譲歩はリビア砂漠での遭難がその大きな転換期となったのである。

サン・テクジュペリーに関する数多くの研究書の中で、マルセル・ミジエオの書『サン・テクジュペリー』が、彼の妻コンスエロのために数ページをさき彼女がサン・テクジュペリーに美学の面で大きな影響を与えたことを示した。確かに、コンスエロの面影を偲ばせるに十分な抄が、彼の作品に描かれていることは既に見た。又、コンスエロ自身、絵も画き、彫刻もし、書も編むといった芸術家であってみれば、彼女の想像力や巧みな表現が唇からあふれて、サン・テクジュペリーの心をゆり動かしたことは想像に難くない。

「おまえの便り、これこそ正しくぼくが必要とするものだ。ぼくは、もう30回も繰返し読んだ。それがぼくにとってどんなに大切なものか、おまえはわかっていない。それは、仕事を目覚めさせる。³⁷⁾他の便りが欲しい。」

このサン・テクジュペリーの便りからも、自分の原稿を妻に読ませ意見を求めていたことから、いかに、妻に大きな信頼の念を抱いていたことか。だが、妻の恨みの念に包まれた言葉は、ひとり研究者にだけの警鐘なのであろうか。

「サン・テクジュペリーについて書いた人たちは、彼の妻に関してなにも触れませんでした。でも、妻は彼の生涯で大きな意味をもっていたのです。³⁵⁾」

伝説化されつつあるこの英雄の愛や情熱を語るとき、婚約者だったルネや7年間の忠実の後にきた5年間の別離を余儀なくされたコンスエロらにたち戻り、彼の真の姿を探る余地は残っている。もう一度、人間臭いものの中に彼を連れ戻さなければ、彼の真実を歪められたまま残される危険はある。『南方郵便機』から『星の王子さま』に経る作品でのサン・テクジュペリーの態度は、女性への義務感にあふれ、同時に、女性を前にしての逃避が見られ、この幸運な逃避のゆえ彼を精神性に向わせ、人間の絆の強さを認識させたのである。

(3)

誤謬をさけるため、サン・テクジュペリーの考えていた愛の意味について少し触てみよう。彼が、ただ単に愛という場合、それは隣人の愛といっ

た概念と変るところがなく、はっきり宗教的なものと規定する。愛は、世界の中に方向を創りだすものであるから、たとえ自分の愛が相手に受け入れられなくとも、一切そのことを口にすべきでないとする。したがって、
「愛は、なによりもまず私の心の実践なのである。」³⁶⁾ 男女のうちに足をとどめる愛は、彼等二人の貯えとするため、この愛は憎悪にもとずき愛という段階に属さなくなると考える。

「愛とは、なによりもまず、黙々と耳を傾けることであり、愛するとは、じいっと眺めることである。」³⁷⁾

つまり、愛とは、神の認識であり、愛するとは、事柄の彼方に読みとれる目差を知ることなのである。『城砦』で示される愛は、神を根底としていたため、一層宗教的臭がたちこめ、サン・テクジュペリーの神に求める加護は痛々しいかぎりである。なんとかして、沈黙のうちにある神への道を再び辿ってゆこうとし、遂には、愛を宗教的なものとはっきり定めることになるのである。

「主よ、遂には、あなたのうちにのみ、愛と愛のもろもろの条件が、なんら争うことなく、一体となって融けあうことでしょ。」³⁸⁾

サン・テクジュペリーの示す愛が、宗教的なものであるというのは、別段『城砦』の中にのみ見られるものでないことは、既に見てきた。彼のいう愛、それは祈りの実践であり、沈黙の実践でもあった。われわれの普通考える人間的な愛とか肉体的な愛を、彼は神聖なる愛の領域に導くのである。サン・テクジュペリーが、われわれに残した最も印象的な言葉を最後に掲げ、この抄を擱くことにする。

「愛するということは、お互を見つめあうということではなく、
同じ方向を一緒に見るということである。」³⁹⁾

- 1) Courrier Sud, œuvres. P.50
- 2) Vol de Nuit, œuvres. P.128
- 3) Terre des Hommes, œuvres P.184
- 4) Ibid., P.363
- 5) Citadelle, œuvres. P.953
- 6) Ibid., P.892
- 7) Serge Logie, L'idéal humain de Saint-Exupéry. P.92
- 8) J.P.Caudron, La vie de Saint-Exupéry, dans "La Vie", No.989.
(Semaine de 22 au 28 juillet, 1964)
- 9) Lettre à sa mère. P.123
- 10) Ibid., P.145
- 11) Ibid., P.146
- 12) Ibid., P.148
- 13) Ibid., P.148
- 14) Ibid., P.151
- 15) Ibid., P.153
- 16) Ibid., P.157
- 17) Carnet. P.47
- 18) Citadelle, œuvres. P.622
- 19) Ibid., P.598
- 20) Citadelle, œuvres. P598
- 21) Ibid P.59
- 22) 『サン・テグジュペリー著作集』 月報1
- 23) Richard Rumbold, Saint-Exupéry tel quel. P.168
- 24) Lettre à sa mère. PP.20—21
- 25) Simone de Saint-Exupéry, Antoine, Mon frère……P.65
- 26) Lettre à sa mère. P.215
- 27) Terre des Hommes, œuvres. P.223
- 28) Lettre á sa mère. P.218
- 29) Carnet. PP.45~46
- 30) Citadelle, œuvres. P.950
- 31) Ibid., P.954
- 32) Ibid., P.910
- 33) J.Huguet, Saint-Exupéry où l'enseignement du Dieu. P.70

- 34) M. Migeo, Saint-Exupéry. P.215
- 35) Ibid P.117
- 36) Citadelle, œuvres. P.611
- 37) Ibid P.949
- 38) Ibid P.962
- 39) Terre des Hommes, œuvres. P.252